

ハーグリーブズにみる英国民衆スポーツ史の分析枠組み

— ヘゲモニー論の狙いと構造を中心にして —

阿 部 生 雄

Hargreaves' approach to the history of popular sport in Britain : with especial reference to the theoretical aim and structure of 'Hegemony'

ABE Ikuo

John Hargreaves' "*Sport, Power and Culture. A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain*" (1986) is probably the most comprehensive work for the history of British popular sports that is written by being based on the thesis of 'Hegemony'. Since 1957 onward, in Britain, the economic determination of Marxist theory, especially a model of base and superstructure, has been criticized by the culturalists such as E. P. Thompson and Raymond Williams, and in its stead Antonio Gramsci's 'hegemony' has attracted their concerns as an available tool for the analysis of culture since the late 1970's. Hegemony is a state of domination that is achieved by the subordinate groups' spontaneous consent which is brought by the dominant groups' intellectual and moral leaderships in the 'civil society' distinguished from 'political society' as a coercive device for direct control. This study analyses the structure of Hargreaves' hegemony-thesis by focusing his works describing the relationships between sport and hegemony. It tries to seek the reason why the hegemony-thesis has been chosen by him as an approach for the analysis of British popular sports through the criticisms against functionalism, interactionism, critical theory of Frankfurt school, and Althusserian approach to the structuralist Marxism. It also examines the reason why the hegemony-thesis seems to be useful for the analysis of British sport as a popular culture by investigating the theoretical significations of the autonomy of culture and sport, the formation of 'common sense', and the process of fragmentation/incorporation/integration. Finally it sees the way how the history of British popular sports could be re-constructed or de-constructed by the usage of hegemony-thesis.

Key words : Hegemony, History, Popular sports, Britain

はじめに

ある歴史的事象や現象をどの様に見、解釈し、評価するかは、すぐれてその研究者の視角や立場と関わる。この点を過敏なほど意識する人は、そうした事象や現象をどの様に分析するか、自分の立場をどこに置くかを強く意識し、一般的に歴史的事象・現象の実証・復元よりも、そうしたものに対する見方、分析、意味の解釈に力点を置く傾向がある。選択された社会学理論や概念は積極的

に援用され、歴史的事象・現象は実証・復元されるというよりも、解説され再構成される。歴史社会学は、こうした側面を強く意識し、またその傾向を幾分強く持っているといつてよいだろう。John Hargreaves は、"*Sport, Power and Culture : A Social and Historical Analysis of Popular Sport in Britain*" (1986) の中で、英国スポーツ史を権力関係から再構成するにあたり、「ヘゲモニー」(hegemony) の概念に注目した。本稿では Har-

greaves が英国スポーツ史を分析するために何故、「ヘゲモニー」に着目し、それをどのように理解し、適用したのかを明らかにしていく。何故なら、Hargreaves のこの著書は、歴史的事実の新たな発見や実証・復元を意図するよりも、英国スポーツの社会的・歴史的な意味を再解釈することに重きが置かれているからである。英国スポーツ史を「再構成」する際に駆使された理論、概念を明確に把握することは、Hargreaves の描く英国スポーツ史の再構成を理解する上で不可欠の理論的作業なのである。

I. 「ヘゲモニー」について

周知のように「ヘゲモニー」という概念は、イタリアの Antonio Gramsci によって習熟された概念である。本論文は Gramsci のヘゲモニー概念の分析と詳述を目的とするものではないが、その基本的な特徴を明らかにしておく必要がある。この言葉は、古代ギリシア語に起源を持ち、「覇権」を意味するが、この言葉に Gramsci 固有の意味が込められ始めたのは1924年頃である¹⁾。しかし Gramsci 思想の核心をなす「ヘゲモニー」論に後の人々が注目し始めたのはそれほど古いことではない。「ヘゲモニー」論が注目されるようになったのは、一つにはマルクス主義の決定論的理論、とりわけ「土台—上部構造」モデルに対するマルクス主義内部からの批判によっている。特に、Gramsci の「ヘゲモニー」論が第二インターナショナル期の「公式」マルクス主義に顕著にみられた経済決定論的史的唯物論の影響から比較的自由であったことは重要であった。彼は土台が上部構造を一方向的に決定するという決定論をとらず、人間集団が意識的に行動することによって土台と上部構造を結合する一つの有機的な「歴史ブロック」を形成すると考えていた。イギリスにおいて、「土台—上部構造」モデルに対する批判は、1957年頃から E. P. Thompson によって “*The New Reasoner*” の中で激しく展開され始めた。Thompson によれば、このモデルは「不適当であるばかりか危険きわまりないモデルである。なぜならスターリンが、社会の中であって変化していく人間のイメージとしてではなくして、意識的な人間の作用力とは無関係の、半ば自動的に作動する機械的モデルとしてこのモデルを用いた²⁾」からである。イギリスにおける Gramsci 再評価は、後にカルチュラルリス

トと呼ばれるようになった Thompson らのこうした認識と密接に関連していたといつてよいであろう。また、ヨーロッパのマルクス主義者の中でも、1960年代後半から70年代にかけて、Gramsci の思想に関する研究が一つの潮流を形成し始め、60年代の「アルチュセール主義」から70年代の「グラムシ主義」へと意識転換が生じ始めたといわれる³⁾。こうした意識転換は、マルクス主義において教義として考えられてきた多くのこと（資本主義崩壊必然の理論、歴史的転換の直接的基礎としての経済理論、虚偽意識としてのイデオロギー、国家を階級支配の道具として把握すること、プロレタリア独裁と前衛政党的理論といったもの）が、マルクス主義内部においてすら有効性を失い始めたことと関連していると言われる⁴⁾。特に、Gramsci 思想の独自性を構成する問題領域として、ヘゲモニー、国家、市民社会、知識人、党、歴史的ブロック、経済主義批判、フォーディズム等が注目されてきた⁵⁾。こうした問題領域は Gramsci の思想の内部で、それぞれ相互に有機的に関連していることは言うまでもない。しかし Gramsci の思想で際だった特徴をなすものは、対立を止揚する固有な実践概念としての「ヘゲモニー」であると言ってよいであろう。この概念は、近代以降、社会的、文化的闘争が「直接支配」を確立しようとするものから、大衆の「自発的同意」を獲得しようとする闘争へと変質しつつあることを示す用語であった。Gramsci によればヘゲモニーとは「支配的な基本的な集団によって社会生活に押し付けられる指導に対して住民大衆が与える‘自発的同意’、支配集団が生産世界におけるその位置と機能によって手にいれる威信（従って信頼）から‘歴史的に’生まれてくる同意⁶⁾」であった。わが国においても、「グラムシのヘゲモニー概念は、階級社会に内在する敵対的な諸関係を‘合意形成’の調停へと転化する特殊な資本主義装置として、‘支配’概念に対置される⁷⁾」というように一般的に理解されている。しかし「ヘゲモニー」は単なる「同意」や「妥協」を消極的に意味する用語ではない。それは政治的国家と市民社会を明確に区別することによって獲得される普遍的な価値創出と合意形成の戦術と考えられる⁸⁾。従来の革命運動では、国家権力を掌握して後に国民的な同意を達成することが目指されていたが、Gramsci の言う「ヘゲモニー」では、政治的変革の前に、従属集団が一

種の国民的同意を市民社会のレベルで「知的・道徳的」改革を通じて獲得することが意図されているのである。オルターナティブの構築、即ち新たな価値と体制への展望を、資本主義体制の内部で「合意的に」形成していく過程が、「ヘゲモニー」に他ならないのである。この理論では、教条的、「公式」マルクス主義が強調する経済主義的、構造的、決定論的な変革理論と対照をなす、人間主義的、実践的、関係的、主体的、変移的、構成的な変革理論が重視されていると言ってよい⁹⁾。このことは、ある文化領域において、支配集団と従属集団が相互に凌ぎを削って指導性を獲得しようとする支配—被支配の関係性の中で、強制ではなく同意に基づいて、弁証法的に新たな価値、オルターナティブを構成し、それを「常識化」し、支配の正当性を獲得していくことを意味している。Raymond Williams が指摘するように、Gramsci のヘゲモニー概念は、土台—上部構造というマルクスの唯物史観の定式構造を突き抜けて、「大多数の人々の内実とコモン・センスの範囲を構成」し、社会的意識の深く浸透する「真に全体的なものである存在」を仮定することによって成り立つものなのである¹⁰⁾。この意味において、ヘゲモニー概念は、支配集団と従属集団が共に依拠する「民衆」文化の普遍的な形成とその性質を解明するための、有用な分析枠組みとして注目されている。

こうしたヘゲモニー論は、民衆文化の一形態としてのスポーツやレジャーを分析する理論装置として、1970年代後半から1980年代にかけて注目され始めた。¹¹⁾例えば Victoria de Grazia は“*The Culture of Consent : Mass organization of leisure in Fascist Italy*” (1981) の中で、ヘゲモニーの概念が「ファシスト独裁体制の研究よりも、自由民主主義体制の研究にたいしての方がはるかに適用しやすい」¹²⁾としつつも、ヘゲモニーを「支配階級がその経済的優越性や政治的力によるばかりではなく、従属的諸集団を支配階級の社会的・文化的諸経験のなかに積極的に包含していくことを通してつくり出される、包括的な階級支配の確立を意味」¹³⁾するものとして把握し、ファシズム化の過程、即ち戦間期の「イタリアにおける同意の文化の形成をめざす過程」¹⁴⁾を解明する理論装置として援用した。また、Peter Bailey は“*Leisure and Class in Victorian England. Rational Recreation and the Contest for Control. 1830—1885*”

(1978) の中で、支配階級によって中・下層階級に展開された「合理的レクリエーション」と「レスpekタビリティ」化の戦略、中産階級の「アスレティズム」の興隆と組織化、商業主義による大衆レジャーの再編、といったヴィクトリア時代のレジャーをめぐる抗争過程を描き、その分析にヘゲモニー論が有効であることを示唆していた。この点はペーパーバック版(1987)の序文の中でははっきりと主張されることになる。「ヘゲモニーとは社会における支配勢力が従属集団にイデオロギー的一致や同意を画策することによって自らの支配を再生産する過程であり、Gramsci が市民社会の領域とみなしたもののなかで、つまり私的な市民や家族の自由を主張できるような—典型的にはレジャーのような—社会生活の領域で遂行される過程である。ヘゲモニーの機能は、主として、ある特定の制度や営みの中で再生産される特定のイデオロギーに存在するが(合理的レクリエーションは、どちらかといえば言説ではないかと言う人もいようが、その一例である)、しかしヘゲモニーの全面的掌握は‘常識’、即ち日常生活とそのインフォーマルな権力関係を形作るあらゆる行動や表現に根ざした社会意識と社会の‘自然な反応’を決定する潜在能力にある」¹⁵⁾。ここでは、Bailey が多くの文献を渉猟する中から選り抜きだした「合理的レクリエーション」の概念が、スポーツやレジャーなどの文化領域で展開する人間的要因の葛藤、抗争、合意形成とその浸透過程を分析するのにふさわしいヘゲモニー論を前提にして、十全な意味を獲得するものとされている。

更に Hugh Cunningham も産業革命期のレジャーを描いた“*Leisure in the Industrial Revolution c. 1780—c. 1880*”(1980)の中で、レジャーをめぐる抗争の分析にヘゲモニー論が有効であることを指摘した。彼の場合、公式マルクス主義の経済決定論を批判しつつも、同時に生産様式を広義に把握する必要を主張した。つまり、音楽、スポーツ、レジャー等は経済生活から切り離されて抽象化された文化として捉えるだけでなく、生産的、物質的営みとして考える必要があるとする。こうした前提に立って、彼は Gramsci のヘゲモニー論に注目する。「Gramsci の思想が重要になるのはここなのである。それは支配と従属をめぐる全状況において経済的、政治的、社会的、文化的諸勢力が絡み合う複合性の中で能動的に変化し

ていくものである。19世紀、ヘゲモニーが確立し、維持される複合的で進行的な過程にあって、レジャーは重要であった。その端緒において、レジャーは真の脅威をもたらすものと考えられた。レジャーは経済問題であった。というのも大衆に与えられたレジャーの量と不規則性は、産業家たちの勤労理念に対立するものであったからであった。また、それは政治的、社会的、道徳的問題でもあった。というのもレジャーの実践とそのイデオロギーは、脅威と無秩序と不道徳をもたらすような実践と結び付いていたからであった。人々にとってその合法性は否定された。唯一、'レジャー階級'のみがレジャーを持った。しかしながら我々が扱った時代の終わり頃までに、総ての人々にとってレジャーの合法性が受け入れられた。ヘゲモニーは維持されていたが、既に述べた近代的レジャーの所産に対する一連の挑戦に必ずや遭遇した。オルターナティブであれ、対抗ヘゲモニーであれ、これらの挑戦は、道徳に無関心の、それ故に野蛮な商業主義の形態を取り、あるいはまた、例えばオーウエン主義や初期福音主義にみるように、合理的レクリエーションのような外面的にはレスペクタブルな形態（意識的な労働者階級であったことから、実際には脅威であったのだが）を取ったのであった。こうした二つの脅威は、完全に打破されたのではないが、先回りして回避されたのであった¹⁶⁾。結論で説かれたこの論旨は、イギリスのレジャーが支配階級の独占物から、階級的、道徳的、社会的、経済的な様々な抗争を経る中で、総ての人々にとって合法的な活動と見なされる合意が形成され、レジャーをめぐるある種の「常識」が形成されたとする、ヘゲモニー論の骨子の上で展開されているのである。

このようにヘゲモニー論は、レジャーやスポーツという文化領域を、従来のマルクス主義が携えていた決定論的、非主体的、構造的、静態的な分析手法を非決定論的、主体的、人間主義的、動態的なものに代えるための理論装置であったともいえよう。その際、これらのレジャー・スポーツ史の研究者たちが、ヘゲモニーを単に従属集団から自発的同意や妥協を引き出して維持する支配の状態を意味するものとして用いたのではないことを理解しておくことが重要である。一見安定して見えるブルジョア・ヘゲモニーは、常にその安定を永続化し得ない「動く均衡」(moving equilibrium)

にある。こうした動態的なヘゲモニー論の指摘は、次の Bailey の言葉に集約されている。「ヘゲモニーは、イデオロギー的に完全に閉ざされたものに導くような閉鎖的秩序として説明される危険がある。しかし、ヘゲモニー論の中心的なポイントは、その統制が決して完結しないというところにある。ヘゲモニーはせいぜい、Gramsci が一時的あるいは'動く均衡'と呼んだところのものしか達成しないのである。支配階級、あるいは指導階級内部の連携は、従属者への接近の度合に応じてシフトし、競い合う。というのも従属者も同様に分裂したり、様々な抵抗をしたり、修正的であったり、あるいは和解的であったりするからである…このようにして、文化構成体の流動性と複合性が強調されることになり、ブルジョア・イデオロギーの構造に完全に拮めとられるか、あるいはそれ自身の真正の民衆文化を主張することに逃避するか、といった構造主義者対文化主義者という二元論のむき出しの対立に一つの効果的な調停を提供することになろう」¹⁷⁾。

2. ハーグリーヴズのヘゲモニー論の構造

1) 「ヘゲモニー」論選択の根拠：決定論批判

Hargreaves は従来の社会学やマルクス主義の諸理論、つまり機能主義、相互作用主義、フランクフルト学派の批判理論、構造主義的マルクス主義、更にはマルクス主義の反映論と再生産論を、「文化」を分析するという視点から批判的に検討し、ヘゲモニー論の可能性を展望した。彼によると機能主義者の文化概念は、「文化は異なる社会的役割や社会における構造的な位置と関連する信念や規範の領域、分野」¹⁸⁾とされ、文化の機能は「社会全体、社会内の諸集団が、経済的、社会的変化から生じる社会的必要や圧力に、そしてまた、近代産業社会の一般的な機能、特に、労働、官僚的管理社会の秩序や多くの都市化された存在といったものに適応していく一つの様式」とされる¹⁹⁾。つまり、機能主義において、文化は社会的な必要や圧力に人々を適合させるためのものという側面が強調され、機能主義者の関心は、個人を望まれるようなものに社会化する点にあるとし、彼らの「文化」把握が批判される²⁰⁾。相互作用主義に対しては、行為者(アクター)や参加者の状況規定性を社会分析に導入する点で意義があるが、彼らが何故その行為をするのか(action-seeking)の社会的

源泉を明らかにする点で弱点を持っている、と指摘する²¹⁾。批判理論は、スポーツの階級支配や搾取の側面、スポーツの商業化と商品化、スポーツと疎外、スポーツによる資本主義的イデオロギーの教化などの側面を明確に指摘してくれる点で優れているが、文化と権力の結び付きを分析していくには、文化に対して敏感であった伝統的マルクス主義の方が優れているとしている。批判理論では、人間が非人間的な社会秩序に組み込まれていることから、全く疎外された存在として規定される。こうした決定論的な理論モデルでは、人間の意識が形成的、過程的であり、不完全で、部分的で、移ろい易いという「中間的」(in-between)状態にあるものという把握が退けられる。その結果、あらゆる文化やスポーツは支配集団の一方的な統制手段となり、人間の生活にとってスポーツは意味があり、有益であるとする立場を無意味化してしまう²²⁾。「このようなアプローチでは、スポーツは他の階級よりもある階級の独占的な所有とならざるを得ないのであり、そこには、それが両階級間の不安定な調和と抗争の闘技場(アリーナ)であると考える余地はない」²³⁾と主張される。構造主義的マルクス主義に対しては、主に Louis Althusser の理論モデルが批判の対象に据えられる。アルチュセリアンの理論では、スポーツは「イデオロギー的国家装置」の一つとされ、時として物理的な力で抑圧してくる軍隊や警察のような「抑圧的国家装置」と区別される。しかし、アルチュセリアンの分析対象は、構造であって人間ではない。人間は社会的・歴史的過程の主体ではなく、生産様式によって決定される構造的諸関係の最も末端に位置づけられるエージェントでしかない。従って、スポーツというイデオロギー的国家装置は、エージェントの意識にかかわらず、支配的社会関係を再生産することになる。「教師やコーチがたとえ進歩的で、非権威主義的であっても、彼らは依然として一つのイデオロギー的機能を遂行するよう宿命づけられた、そのシステムのエージェントなのである」²⁴⁾。あらゆるイデオロギーや社会関係は、構造によって決定されるとするこのアプローチにおいて、イデオロギーは限りなく文化と同質化し、あらゆる文化がイデオロギーとなってしまふ。文化の分析にとって重要なことは、イデオロギーと非イデオロギーの要素を識別し、市民社会と国家を識別することである、

として Althusser のイデオロギー的国家装置論を彼は批判する²⁵⁾。

更に Hargreaves は、「公式」マルクス主義は論外として、社会現象としてのスポーツを分析する上で強い影響力を持ってきたマルクス主義には、反映論、再生産論、ヘゲモニー論の三つのアプローチがあるとし、ヘゲモニー論の有効性を指摘した²⁶⁾。彼は反映論と再生産論を次のように批判する。反映論では、「資本主義の構造とその文化的エトスは資本主義的諸勢力と支配階級の利益によって完全に決定され支配されている」と考えることから、「スポーツを資本主義の単純な反映として性格づけ、その結果「スポーツは全面的に疎外的な活動」と位置づけられることになる」とする²⁷⁾。一方、再生産論では、「文化とスポーツはそれらの固有性という点で、つまりそれらの差異や自律性という点で資本主義的生産様式と支配的社会関係と関連している」とすることから、反映論とは逆に、ある文化やスポーツの自律性が資本主義的生産様式や支配的社会関係を再生産することになるとする²⁸⁾。こうして彼は、反映論と再生産論を共に、「資本主義社会に対する一面的、決定論的、静的モデル」²⁹⁾であるとして退けることになる。このように Hargreaves は、機能主義者の操作主義的な「文化」概念、相互作用主義者による「主体性」概念の欠如、批判理論に顕著な人間の意識の形成的側面の軽視、構造的マルクス主義に見られる文化とイデオロギーの混同、マルクス主義的反映論と再生産論に顕著な決定論を批判したのだが、そこには常にある一定方向にしか結論を導かないような理論としての「決定論」に対する批判的視座が一貫しているといえよう。

2) ハーグリーブズのヘゲモニー概念

ヘゲモニー論にとって重要な理論的前提は、「権力」(power) を実体概念としてではなく、関係概念として捉えることである。権力は単に「個人や集団のエージェントが他者を支配することを可能にする所有物」や「社会構成体における単一の地位や次元に備わっていたり、そこから生まれてくるもの」として捉えられてはならない³⁰⁾。権力は市民社会の隅々に浸透し、様々なエージェント間で機能する関係性の作用力に他ならない。権力とは「エージェント間の関係、即ち、エージェントの関連資源への接近や、他のエージェントと

の闘争という特定の条件下でとられる適切な戦略の利用といったものによって決定される所産³¹⁾を意味する。市民社会において、支配集団と従属集団との権力関係は、前者の力と影響力が必ずしも全面的で一面的であるわけではない。それ故に支配集団は市民社会の内部であらゆる戦略や言説を用いて従属集団の同意を得ようとする。また、この関係は常に勝者が敗者を犠牲にして利益を得るというゼロ・サム・ゲームとして構造化されているのでもない。現代民主主義における権力関係では「総ての陣営、つまり支配集団も従属集団も闘争の過程で、また両者の和解から、何がしかを得る」³²⁾のである。

Hargreaves はこのように権力を関係概念として捉えることによって、ヘゲモニーを次のように定義する。「我々はヘゲモニーを、了解された利害に従って、ある階級による、あるいは、ある階級の部分や同盟による、社会の他の部分に対する指導性の達成と捉える。それは、一方における力と強制の利用と、他方における権力行使に対する自発的同意との間にある均衡が移動し、その結果、権力関係がその後者の様式でますます機能するという、一つの権力関係である」³³⁾とする。その権力関係は優越する集団が従属集団の同意を「道徳的」指導によって獲得する能力に規定される。ヘゲモニーとは「ある支配階級やその一部が社会に対して行使する特定のリーダーシップを意味する。即ちそのリーダーシップは単に生産手段の所有と統制、国家権力の独占や人民に否応なしに国家観念を課していく能力だけでなく、同時に「道徳的」指導に基づいているのである。つまりそれは、従属するものの同意を獲得する能力であり、それは何か黙従以上のものに匹敵するような、そしてまた全社会を「歴史ブロック」に積極的に統合するような従属者の同意を獲得する能力である」³⁴⁾とする。このように、ヘゲモニーとは優越する集団が従属集団の自発的同意を暴力や強制によってではなく、非暴力的、合法的な「道徳的」指導によって達成しようとする能力、権力関係として把握されている。それではこのような「ヘゲモニー」論がどのようにスポーツの分析に有効であるというのであろうか。

3) ヘゲモニーと文化・スポーツの自律性
ある階級がヘゲモニーを達成するには社会的、

経済的、政治的戦略以上に文化的戦略が重要とされる。ヘゲモニーとはある階級や集団の支配を再生産することでもある。「支配」再生産の過程に文化が戦略的な機能を果たすということは、文化が権力と密接な関連を持っていることを意味している。しかし、文化はある階級の独占的な所有物ではない。むしろある文化がある階級の権力網にどの程度貢献するかは「それ自体の固有な性格」³⁵⁾によっているのであり、「自らを他のものから文化構成体の固有な型として区別する自律的特徴によっている」³⁶⁾のである。文化のこの自律的な特徴の故に、あらゆる階級や集団は、その文化を通じて自らの陣営に人々を編入しようとする文化戦略を展開することが可能となる。ある文化はある階級の生活様式の単なる反映で、ある文化はある階級を再生産するという単純な決定論を退ける理論装置として、ここでもヘゲモニー論は機能する。Hargreaves はスポーツにヘゲモニー論を適用するに際して、スポーツを自律的な文化として捉えることの重要性を主張する。その自律性は「支配階級・集団が他者に自己の考えや利益を課すためにスポーツを利用し得る範囲であり、また従属階級・集団がそうした試みに抵抗し、克服する範囲」³⁷⁾に存在する。つまりスポーツの自律性は、対立する諸階級、諸集団が共に利用し得る、非決定的な文化領域に存在しているのである。こうした文化領域でスポーツとその支配の正当性をめぐって、異なる階級と集団間の社会的、文化的闘争が行われるのであり、この意味で、スポーツは「権力の作用する闘技場（アリーナ）」³⁸⁾なのである。

4) ヘゲモニーと「常識」：民衆文化としてのスポーツ

ヘゲモニー論で重視される側面は「常識」(common sense)の形成という側面である。Hargreaves によれば、Gramsci が最も強調したのは「ある支配の歴史的な形態が実践的意識の中で、つまり日常生活の中やそれを通じて「常識」として沈澱し、自然化し始めるということであり、その結果、最も無害に見える価値、意味、営みがある階級のヘゲモニーを再生産する」点であるとする³⁹⁾。つまりヘゲモニーとは、ある文化（価値、意味、営み）が階級間の支配と被支配の抗争を通じて、また日常生活の経験を通じて、階級間を縫

合する「常識」に転化され、被支配階級の同調と自発的同意が達成されていく過程に他ならないのである。しかしこの過程は決して過去と断絶して進行するのではない。それは文化の内在的な意味や価値が選択され、伝達され、ヘゲモニーを再生産するという「選択的伝統」でもある。「民衆のものであれ何であれ、伝統は常に挑戦され選択される。それは現在に結び付き現在を正当化する過去の一つの翻訳である。そしてヘゲモニーの内部では、通常、支配階級の関心には、この選択が「伝統」として通用し、可能な限り対抗的な伝統の形で挑戦することのないように定義され、構成されることを望むということが存在する」⁴⁰⁾。現在を、正当化する過去は伝統として選択され、従属集団に違和感なく、広く、深く、自然に浸透することが望ましいのである。このように、ヘゲモニー論は、一方では非決定論的、動態的に文化の意味が新たに構成され、他方で「選択的伝統」と「常識」化によって支配的文化のヘゲモニーを再生産するという、文化の双方向的機能を提起しているといえよう。

「常識」化の過程は、Hargreaves がスポーツを民衆文化の一形態として把握しようとする 것과密接に関連している。ヘゲモニー論において民衆文化とは、支配文化や上流階級文化や高級文化の対概念としてだけでなく、ある自律的な文化(スポーツ)が、ある階級の支配や権力を通じて、より広範な人々の「常識」(民衆文化)に変化していく過程(ヘゲモニー達成)を際立たせる概念であるといってもよいであろう。それはスポーツがある階級の独占物から、階級を越えた全体的で普遍的な文化に変質する過程を見ようとするための概念であるといってもよい。しかし、ある文化の全体的で普遍的な文化への変質は、必ずしもファシズムや全体主義のような一元的統制の貫徹を意味するものではない。「ヘゲモニーはある特定の階級に保障されている訳ではない」⁴¹⁾のであり、ヘゲモニー論の特色は、既に指摘したように、支配階級の統制が決して完結しない「動く均衡」にあるといわれるからである。

5) ヘゲモニーと分断・編入・統合の過程

ヘゲモニーは多くの人々を絶えず分断し、組み入れていくことによって達成され、維持される。「従属集団の党派化、あるいは分断化は、ヘゲモ

ニー維持の前提条件」⁴²⁾とされる。こうしたことからヘゲモニー論において階級は常に形成されていく過程にあるものとして把握される。「諸階級は造られ、常に再生産される。そして重要な点だが、経済的、政治的、文化的、イデオロギー的闘争を通じて再構築される。階級が1つの過程であることから、諸階級は、殆ど、いや滅多に完全に統一され、同一の実体となることはない」⁴³⁾。階級は流動的、過程的であると同時に、非階級的要素(性、人種、年齢等)によっても多様に分断される。階級の複合的な分断化により、分断された従属集団は「それらの各々が支配集団と異なる関係につく」⁴⁴⁾ことになる。つまり分断化は新たな階級関係を構成し、その階級間の権力関係の中で従属集団のある部分を編入的、協調的(corporative)に変え、ヘゲモニーに統合することを可能にするのである。支配集団の採る編入の戦略(strategies of incorporation)は強制、操作、説得、交渉、譲歩、妥協等、多様である。それに応じて従属集団の戦略も、積極的忠誠、暗黙の同意、プラグマティックで手段的な参加、服従等、様々である⁴⁵⁾。しかしその戦略の多様性にもかかわらず、スポーツはこうした従属集団の分断・編入・統合にとって重要な文化戦略となる。Hargreaves によれば、スポーツはヘゲモニーの達成に貢献したとされる。スポーツは一方で従属集団を分断する文化となり、他方では彼らをヘゲモニーの下で統一し、一つの社会構成体に再編する文化となる。「スポーツは従属階級を解体し、分断化する一方で、支配集団とその支持者を統合する」⁴⁶⁾文化なのである。従って、Hargreaves が一貫して注目するのは、自律的な民衆文化としてのスポーツと社会の権力関係が織りなす権力闘争の問題なのである。Hargreaves がヘゲモニー論を用いて明らかにしようとするのは、支配集団と分断された従属階級の諸部分の多様な権力関係を通じて、英国民衆スポーツが究極的により広範な「国民民衆文化」(national popular culture)⁴⁷⁾としてヘゲモニーを達成していく過程なのである。それでは英国民衆スポーツはどのようにヘゲモニーを達成したのであろうか。Hargreaves の提起するそのプロットを要約し、幾分たりともその問題点を見てみよう。

6) 英国民衆スポーツ史とヘゲモニー論

産業革命以前の支配集団の民衆スポーツに対する寛大な姿勢（黙認やパトロン）は、ホイッグ権力者とそれに対立するトーリー権力者、そして従属集団という三者の関係性に基づいていた。ホイッグ権力者は「文化的ヘゲモニー」を第一の戦略とし、トーリー権力者は地方に根を張り、庶民との家父長的紐帯を支配の原理としていた。庶民は未だ組織されておらず群衆でしかなかった。支配集団は二分され、庶民はその両者と「家父長的温情と尊敬」⁴⁸⁾という相互の絆よりも、もっと打算的な互酬制の関係によって結ばれていた。支配集団が自らを誇示するためにパトロンをする「偉大なる者の劇場」⁴⁹⁾は十分に機能し、無秩序で粗暴な民衆スポーツは寛容に黙認された。この当時の支配集団は分裂しており、ヘゲモニーを達成することはできなかった。

産業資本主義の確立期には、工場制度の広がり、急激な都市化、闘争的な組織的労働運動の出現が生じた。支配階級は従属集団の無秩序に脅威を感じ始め、統制の手段も抑圧的になり始めた。民衆及び労働者階級に中産階級のエトス（レスペクタビリティー）を身につけさせるための様々な団体が結成された⁵⁰⁾。福音主義者の団体、安息日遵守主義者の団体、禁酒団体等は民衆の非労働時間の活動や民衆スポーツを監視し、抑圧し始めた。また民衆スポーツを通じて従属集団を支配階級の望む方向に水路づけようとする「合理的レクリエーション」⁵¹⁾のキャンペーンが展開された。支配階級は伝統的で粗野な民衆スポーツに理解を示す「民衆を知っているスポーツマン」と「博愛的戦略」で民衆スポーツを抑圧する「民衆のための改良家」に分裂した⁵³⁾。この過程で従属集団も熟練労働者・レスペクタブルと、未熟練労働者・ラフとに分断された。こうして合理的レクリエーションを推進する中産階級の支配集団とレスペクタブルな熟練労働者の連合と民衆文化と民衆スポーツに理解を示す支配集団とラフな未熟練労働者の連合が形成されたが、何れの陣営もヘゲモニーを達成することはできなかった。

ヴィクトリア時代中期に、パブリックスクールを中心に「道徳はゲームを通じて伝え得る」⁵³⁾という「アスレティスト・テクノロジー」が発達し、次第に分裂していた支配階級のスポーツ観を統合し始めた。支配階級を統合したアスレティシ

ズムはブルジョア・ヘゲモニーの確立に貢献した。1880年代、組織的労働者階級は再構築されたスポーツに参加し始めた。特に下層中産階級と熟練労働者のレスペクタブルな連中がその熱狂的な支持者となった。この動向はスポーツのプロフェッショナルリズムの発達を導き、アマチュア・ジェントルマンのヘゲモニーを揺るがした。アマチュア志向と企業志向に支配集団のスポーツ戦略は分裂したが、アスレティスト・テクノロジーは両方に貫徹した。スポーツの商業化に乗じて発達した企業モデルは、労働者階級を意志決定に参加させない非人格的な統制によって彼らを原子化された消費単位に位置づける過程をもたらした。

大衆娯楽としてのスポーツは、1880年頃から第一次大戦にかけて飛躍的に普及した。帝国主義への動向と呼応して、アスレティスト・テクノロジーはパブリックスクールの枠を越えて、少年隊や少年禁酒団やボーイスカウトなどの青少年組織に普及した。博愛的戦略の延長にあったこれらの運動は、レスペクタブルな労働者階級や熟練労働者の自由時間を組織することにかかなりの成功を収め、労働者階級に対するヘゲモニーを確立した⁵⁴⁾。しかしこの間にも労働者階級は分断された。協調主義的な労働組合、新労働組合、社会主義的諸団体は政治的、経済的に分断され、共にレスペクタビリティーを志向し、合理的レクリエーション路線を補完するかのように民衆スポーツの改造に手を貸し、スポーツの企業モデルやクラブ・モデルに対抗できる固有のオルターナティブを提起することは出来なかった⁵⁵⁾。

戦間期はスポーツがはっきりと大衆文化の一つに位置づくると同時に、スポーツへの国家介入が確立した時代であった。野外活動が隆盛し、ユースホステル、休日同好会等が労働者階級に浸透した。労働党、共産党も合理的レクリエーション路線を補完した。社会統制の意図を持つ博愛的戦略と合理的レクリエーションの路線に沿って身体的レクリエーション中央審議会(CCPR)が設立され、ジェントルマン・アマチュアのヘゲモニーを保持しつつ、人々の自由時間に国家介入を導く先導的役割を果たした。1937年の身体訓練レクリエーション法は、最初の重要な国家介入となり、スポーツは労働者階級を国民の中に編入する手段としての「国民民衆文化」の一つとして確立した。この過程で新聞やラジオなどのメディアが重要な役割を

果たし始めた⁵⁶⁾。

1950年代に、スポーツは明確に商業主義と消費文化に組み込まれた。労働者階級は消費文化の中で私別化 (privatized) され、企業セクターや公共セクターによって自在に統合される存在となり始めた。生産の統制と政治の統制をめぐる闘争は今や次第に分配と消費の闘争に移行し、消費が権力と統制の中心的要素となり始めた。消費文化は若さ、健康、性的魅力などによって個人を刺激しつつ、「標準的個人」⁵⁷⁾を作り出す。スポーツは「万人の健全娯楽」⁵⁸⁾として商品化される。統制の形態は禁止的、否定的統制から、鼓舞による統制に変化していく。このようにして消費文化の中で私別化された従属集団はヘゲモニーに編入される。一方、国家は中央政府機構や地方自治体、様々な準政府機関や非政府組織を通じて、スポーツに大規模に介入し始めた。国家介入を正当化する論理はウォルフエンデン委員会報告書、「*Sport and the Community*」(1960)の中で説かれるスポーツによる社会調和の達成、国際的体面を保つ競技力の向上、スポーツのナショナル・インタレストへの貢献、福祉国家の中にスポーツをプログラム化すること、などに象徴される。スポーツ・カンシルの狙いは階級闘争を非政治化し、従属集団を協調主義路線に向けて再構造化し、ヘゲモニーに編入することであった⁵⁹⁾。

こうしたヘゲモニー論からの英国民衆スポーツ史のプロットは、従来のスポーツ史に顕著な貴族階級、中産階級、労働者階級という固定的な権力関係と階級関係からの叙述を修正するものであったといえよう。Hargreavesのヘゲモニー論に基づいた英国民衆スポーツ史においては、スポーツと階級間の関係、スポーツと非階級的要素や階級との複合的關係が視점에据えられ、スポーツは階級関係を流動化し改造する文化として位置づけられる。更に、そこでは、スポーツは支配集団と従属集団との多様な抗争と分断と同調の過程を通じて、一種の共通文化ともいべき「国民民衆文化」に止揚されることが展望されている。しかし、彼のヘゲモニー論は、スポーツの領域で達成されたブルジョア・ヘゲモニーが、様々な形式の国家介入、消費文化、メディアの攻勢によって再生産される点を詳細に考察している反面、そのヘゲモニーの「均衡」を移動へと導くスポーツのオルタナティブを十分に指摘していない。ヘゲモニー論

を「動く均衡」という理論装置として捉えるとき、この欠如の意味は大きい。

実際、Hargreavesの英国民衆スポーツ史に対する批判の多くは、こうした点に集中しているといつてよいであろう。例えば、S. G. Jonesは、Hargreavesのヘゲモニー論にとって「スポーツは人間の自由の形式でも構造の奴隷の形式でもなく、むしろ支配集団が時として強制を伴う同意と妥協を得る手段として、従属集団に対する恒常的な勝利を手中にしなければならない社会階級内、あるいは間の、歴史的な抗争過程である」⁶⁰⁾と指摘した上で、「スポーツは反対や変化や自由を喚起し得ると約束されているにもかかわらず、例えばメディアの影響を通じて、支配階級ヘゲモニーを永続化するものとして再び特徴づけられてしまうのである」⁶¹⁾と批判する。Tony MasonもHargreavesの本を「マルクス主義の視点から英国スポーツを説明しようとした最も体系的で詳細な試み」と位置づける一方で、彼のヘゲモニー論を「Hargreavesは近代民主主義において交渉の過程が、他の社会生活の領域と同様、スポーツにおける支配集団と従属集団の間でも生じるということを強調するために、Antonio Gramsciのヘゲモニーの考えを用いている。にもかかわらず、英国スポーツはブルジョア・ヘゲモニーの維持に貢献したと結論するのである」⁶²⁾と揶揄する。更にRichard Holtは「ヘゲモニーには価値がないということではなく、包括的な説明として用いられるよりも、むしろスポーツのコンテクストに厳密に位置づける必要がある」⁶³⁾としつつも、Hargreavesの英国民衆スポーツ史に対するヘゲモニー論的分析に懐疑的である。Holtは「ヘゲモニー」がマルクス主義内・外で未だ議論されている概念で、その用法には十分な注意が必要であるとす。「彼の『歴史』とかいうものは具体的な歴史の事例を犠牲にして、精緻に質を高める抽象的な公式に満たされ過ぎており、『ヘゲモニック』アプローチを単純に都合のよい『キャッチ・オール』概念と見なし、それを粗雑に用いる真の危険がある」⁶⁴⁾と批判する。Holtにとってヘゲモニー論の持つ幻想は「あらゆる種類の抗争する利害や反応を説明し得るとする思想の一つの閉ざされた体系」⁶⁵⁾に存在するのである。こうしたヘゲモニー批判をベースにして、HoltはHargreavesの英国民衆スポーツ史のプロットに疑義を呈する。Har-

greavesによれば、19世紀スポーツには、一方で「生まれの良い者」と「富める者」とを一つのエリートに束ねるアマチュアリズムというブルジョア・イデオロギーがあり、他方でスポーツによって従属集団を分断し、熟練労働者とレスベクタブルな労働者階級をヘゲモニーに組み入れる「博愛的戦略」があったとされる。しかし、こうした指摘は究極的に「スポーツは支配階級を確かなものとし、労働者階級を分断するものとなる」⁶⁶⁾という主張しか導かないのではないかと批判する。しかしより問題なのは、Hargreavesが指摘するようには「スポーツは直接的に中産階級と上流階級を結合することはなかった」⁶⁷⁾点であり、また「アマチュアリズムのイデオロギーに組み入れた労働者の範囲はかなり制限されていた」し「労働者階級スポーツマンは、概して、アマチュアの価値に対して冷淡であった」⁶⁸⁾点である。スポーツが上流階級と中産階級を統合し、労働者階級を分断したというHargreavesの主張は、Holtによれば、どのスポーツが、いつ、どのように、どのエージェントによってなされたのかを、歴史的文脈に沿って、実証的に考察されねばならないのである。ここにヘゲモニー論に対する歴史社会学と歴史学とのアプローチの相違が露になる。ヘゲモニー論が果して支配集団の支配を永続化する理論装置かどうかは、今後の検討課題である。しかし、ある文化を諸階級や社会の諸部分が様々な関係性の中で共に構成していくという視点の導入は、確かに、英国民衆スポーツ史を「再構成」するものであった。

結 語

Hargreavesの権力論的な見解からすると、スポーツは従属集団を分断すると同時に彼らを支配集団のヘゲモニーに編入する文化であった。英国においてスポーツは非肉体労働者・熟練労働者と半未熟練労働者とを分割し、レスベクタブルな労働者とそうでない労働者とを分割し、上層労働者階級と下層労働者階級を分割した。更にスポーツは性、年齢、人種などの非階級的要素と結合することによって、伝統的な人々と私別化された人々、白人と非白人、労働者階級男性と労働者階級女性、といった分割をもたらした⁶⁹⁾。こうした従属集団の絶えざる分断化によってもたらされる多様な権力関係を通じて支配集団はヘゲモニーを強化し

た。Hargreavesが指摘するように、中産階級のアスレティズムなくして組織的スポーツの発展はなく、合理的レクリエーション運動とアスレティストの伝道なくして組織的スポーツが普及し、労働者階級文化の一部になることもなかった。アマチュア・スポーツへの労働者階級の進出がなかったならば大衆スポーツの商業的発展も起こり得なかった。大衆スポーツの発展がなければ国家はナショナル・インタレストの名目でスポーツに介入することもなかった⁷⁰⁾。自律的な文化領域としてのスポーツは、確かに権力の作用する闘技場である。しかしこの闘技場は、常に支配集団のヘゲモニーを保証する場ではない。支配集団と従属集団の闘争、対話過程、相互的順応を通じて、広範な合意と「常識」を形成し、スポーツがより広範な民衆文化として新たな価値転換を遂げていく場でもあるといえよう。しかし、ヘゲモニー論が「閉ざされた理論体系」であるかどうかは、今後の議論を待たねばならない。また、文化としてのスポーツを権力論からのみ論じていくことは、一定の危険性が伴うようにも思われる。というのもスポーツを行う人々の動機と権力とは必ずしも一致せず、一定の距離があるからである。またスポーツという文化の自律性は、単なる権力にとっての使用価値の故に問題となるのではない。人々がスポーツを生活の中で実践し、享受し、スポーツ自体が持つ内在的価値を体感し、考察し、哲学するが故にスポーツは文化としての自律性と普遍性を持ち得るのである。スポーツ史を構想するとき、スポーツの利用をめぐる権力闘争だけでなく、人々を魅きつけるスポーツの普遍的な内在的価値を描く歴史叙述が求められるように思われる。

引用文献

- 1) 片桐 薫 (1991) : グラムシの世界. 勁草書房 p. 164. 片桐によれば、Gramsciが「ヘゲモニー」という用語を最初に用いたのは1924年のウィーンからの手紙からであるという。
- 2) Tompson E. P. (1957) "Socialist Humanism" in *The New Reasoner*, Summer : 113. (この引用文は Harvey J. Kaye. "The British Marxist Historians. An Introductory Analysis" Polity Press 1984. p. 172. から) E. P. Tompsonは1961年に Raymond Williamsの "*The Long Revolution*" に対する批評でも、マルクス主

- 義者が土台—上部構造のメタファや「法則」という決定論的概念を破棄すべきことを訴えた。
- 3) 前野 良 (1988) : グラムシ政治学と現代. 現代の理論 : 3月号 第247号 p. 6.
 - 4) 同上 p. 6.
 - 5) 松富弘志 (1988) : グラムシの『市民社会』概念について 同上 p. 20.
 - 6) 山崎 功監修, 代 久二編集 (1963) : グラムシ選集 第三巻 pp. 88-89. 合同出版
 - 7) 小倉利丸 (1987) : グラムシの現在性. 現代の理論 : 8月号 第240号 p. 40.
 - 8) 同上 pp. 40-41. ヘゲモニーとは普遍的価値の創出, 合意獲得の過程, 経緯であり, Gramsci によって次のように理解されていたものであった。「第三の契機は, 自己の同業組合的利害が, 現在と将来の発展の中で, 単なる経済的な集団の同業組合的な範囲をのりこえ, ほかの従属的諸集団の利害ともなることができ, またならなければならない, という意識に達する契機である。これは, もっとも純粹に政治的な段階であり, 構造から複雑な上部構造の領域へきっぱり移行したことを示している。この段階では, 以前に発芽していたいくつかのイデオロギーが“党”になり, たがいに対決し, 闘争し, ついには, それらのイデオロギーのうちの一つだけが, または, 少なくともその一つの組合せだけが, 優位を占め, 打ち勝ち, 社会の全領域に普及するようになり, 経済的, 政治的目標の単一性のほかに, 知的, 道徳的な統一性をも生みだし, 荒れ狂う闘争のまととなるすべての問題を, 同業組合的な平面ではなしに, “普遍的”な平面に提起し, こうして, 一連の従属集団に対する基本的な社会集団のヘゲモニーを創出しようとする」
 - 9) 片桐 薫 (1991) : グラムシの世界. 勁草書房. pp. 132-158.
 - 10) 小倉利丸 (1987) : グラムシの現在性. 現代の理論 : 8月号 第240号 pp. 41-2.
 - 11) イギリスのレジャー史, スポーツ史に採用されている社会史の様々な研究視角 (ヘゲモニー論を含む) の紹介と論争については, 以下の論文を参照せよ。阿部生雄 (1989) : 連載. スポーツ史の現代的視覚—20— イギリス・レジャー史, スポーツ史の中の社会史論争—その断章 体育の科学 : Vol. 39. 8月号. pp. 647-651. 阿部生雄 (1991) : 補遺 2 イギリス, スポーツ史・レジャー史の研究動向 : 1970-1989 (ピーター・マッキントッシュ 著 寺島, 岡尾, 森川編訳 (1991) 「現代社会とスポーツ」所収. 大修館書店 pp. 184-218.)
 - 12) Grazia, Victoria de (1981) : *The Culture of Consent : Mass organization of leisure in Fascist Italy*. Cambridge Univ. Press. (豊下・高橋・後・森川共訳「柔らかないファシズム」雄斐閣選書 1989. PP. 38-9.)
 - 13) Ibid., p. 37.
 - 14) Ibid., p. 4.
 - 15) Bailey, Peter (1987) : *Leisure and Class in Victorian England. Rational Recreation and the Contest for Control. 1830-1885*. Methuen. London. pp. 9-10.
 - 16) Cunningham, Hugh (1980) : *Leisure in the Industrial Revolution c. 1780-c. 1880*. Groom Helm. London. 1980. p. 198.
 - 17) Bailey, Peter. op. cit., p. 10.
 - 18) Hargreaves, John (1982) : *Sport, Culture and Ideology*, in “Sport, Culture and Ideology” edited by Jennifer Hargreaves. Routledge and Kegan Paul. p. 35.
 - 19) Ibid., p. 35
 - 20) Ibid., pp. 34-39.
 - 21) Ibid., pp. 39-41.
 - 22) Ibid., pp. 41-44.
 - 23) Ibid., p. 43
 - 24) Ibid., p. 45
 - 25) Ibid., pp. 44-46.
 - 26) Hargreaves, John (1982) : *Sport and Hegemony : Some Theoretical Problems*, in “Sport, Culture and the Modern State” edited by Hart Cantelon and Richard Gruneau. University of Tronto Press. p. 104. Hargreaves が「公式マルクス主義」と呼ぶものは, ソビエト連邦や中華人民共和国 (特に毛沢東主義) のマルクス主義を指している。
 - 27) Ibid., p. 104. Hargreaves は, 反映論をベースにしたスポーツ分析として, J. M. Brohm, “Sport : A Prison of Measured Time” (1978),

- P. Hoch, "Rip Off The Big Game" (1972), G. Vinnai, "Football Mania" (1973) を挙げている。(Ibid., p. 137.)
- 28) Ibid., pp. 104-105. 再生産論によるスポーツ分析の代表として, P. Bourdieu の "*Sport and Social Class*" (Social Science Information 17, 6, 1978) が挙げられている。
- 29) Ibid., p. 105.
- 30) Hargreaves, John (1986) : *Sport, Power and Culture. A social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain*. Polity Press. (佐伯聰夫・阿部生雄共訳 (1993) : スポーツ・権力・文化, 英国民衆スポーツの歴史社会学. 不味堂出版. p. 16)
- 31) 同上 p. 16.
- 32) 同上 p. 19.
- 33) 同上 pp. 20-21.
- 34) Hargreaves, J. op. cit. (Sport and Hegemony) p. 114.
- 35) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 25.
- 36) 同上 p. 25.
- 37) Hargreaves, J. op. cit. (Sport and Hegemony) p. 118.
- 38) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 30.
- 39) Hargreaves, J. op. cit. (Sport and Hegemony) p. 115.
- 40) Ibid., p. 125.
- 41) Ibid., p. 115.
- 42) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 159.
- 43) 同上 pp. 19-20.
- 44) 同上 p. 159.
- 45) Hargreaves, J. op. cit. (Sport and Hegemony) p. 119.
- 46) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 279.
- 47) 同上 p. 277.
- 48) 同上 p. 35.
- 49) 同上 p. 36.
- 50) 同上 p. 39.
- 51) 同上 p. 41.
- 52) 同上 pp. 58-59.
- 53) 同上 p. 86.
- 54) 同上 pp. 89-98.
- 55) 同上 pp. 112-126.
- 56) 同上 pp. 126-135.
- 57) 同上 p. 188.
- 58) 同上 p. 191.
- 59) 同上 主に第9章を参照せよ。
- 60) Jones, S. G. (1988) : *Sport, Politics and the working class. Organised labour and sport in inter-war Britain*. Manchester Univ. Press. pp. 7-8.
- 61) Ibid., p. 8. Jones はこうしたヘゲモニー論に対する批判と同時に, 英国の戦間期労働者階級がスポーツに殆ど影響を及ぼさなかったという Hargreaves の指摘に対して「過度の単純化」として批判している。彼は「Hargreaves が広範な労働運動の研究を行っていたならば, 自らの主張を論駁する多くの証拠を見出しただであろう」(Ibid., p. 11) とし, 戦間期の労働者階級の果たした英国スポーツに対する貢献を高く見積ろうとしている。
- 62) Mason, T. et. al (1989) : *Sport in Britain. A social history*. Cambridge Univ. Press. pp. 346-7.
- 63) Holt, Richard. (1989) : *Sport and the British. A modern history*. Clarendon Press. p. 364.
- 64) Ibid., p. 364.
- 65) Ibid., p. 364.
- 66) Ibid., p. 363.
- 67) Ibid., p. 364.
- 68) Ibid., p. 364.
- 69) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 159.
- 70) 前掲書 (佐伯・阿部共訳) p. 279.